

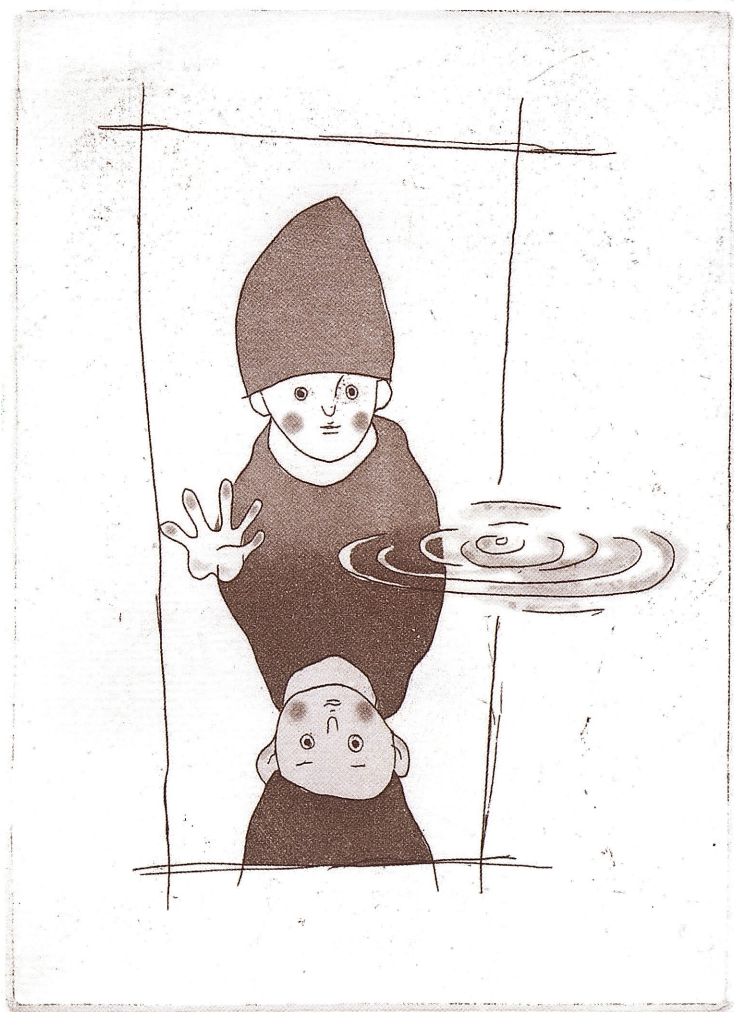
# 幼 児 の

# 教

# 育

家庭・保育所・幼稚園

11  
2005



最

新

刊

●新時代への提言●

# 幼稚園と小学校の 連携方策

私立幼稚園経営者懇談会 編著  
吉田正幸【(有)遊育代表取締役】

18×13cm/188頁  
定価1,260円(税込)

幼稚園と小学校では、その教育内容・方法はどう違うのでしょうか？ 子どもたちが本来の姿で生活できる力を育てていくためには、幼稚園と小学校との違いを踏まえた連携をとっていくことが大切です。

本書は、幼小連携のアンケート調査を踏まえ、さまざまな実践例を取りあげながら、メリット、課題、問題点などを探っています。子どもにとっての最善策をいっしょに考えてみましょう。

## 【目次から】

- 第1章 今なぜ幼小連携が問われているのか
- 第2章 幼小連携アンケート調査から見えてくるもの
- 第3章 幼小連携の実践事例
- 第4章 これからの幼小連携とは
- 終章 幼経懇からの提言

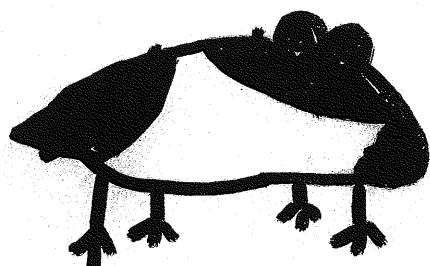
キンダーブックの

**フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第104巻 第11号



# 幼 児 の 教 育 目 次

— 第一〇四卷 第十一号 —

© 2005  
日本幼稚園協会

巻頭言 「保育カウンセラー」制度の実現を期待する……………柴崎 正行…(4)

十八世紀ドイツの子どもの本(6)

— 児童書の成立と受容を理解するために —……………佐藤 茂樹…(8)

ある日……………(18)

保育の場とジェンダー……………金子 省子…(20)





現職教育にむけて……………大戸美也子…(26)

私を通った幼稚園・保育園(6) 欠席の多い園児だった私……………津守 房江…(36)

児童学からの出発

地域・子ども・大人の「関係をつなぐ」(3)……………小川 清美…(43)

保育におけるケアと保育者のゆらぎ

―研究者を志すものとして―……………横井 紘子…(52)

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(8)……………庄籠 道子…(58)

表紙絵／中井絵津子

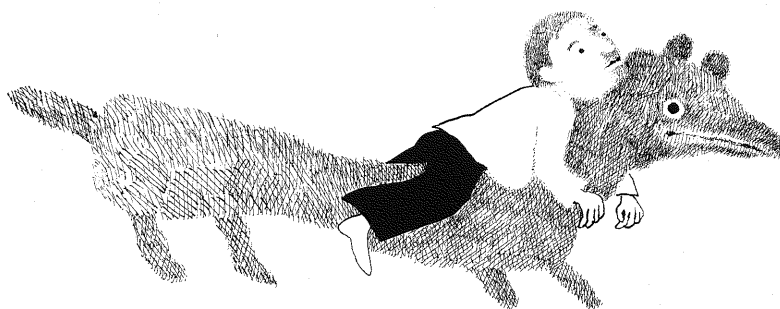
扉題字／津守 眞

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たえ「秋の無題」

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子





## 巻頭言

# 「保育カウンセラー」制度の 実現を期待する

柴崎 正行

どのような制度か

平成十七年一月二十八日に中央教育審議会から「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえ、今後の幼児教育の在り方について―子どもの最善の利益のために幼児教育を考える―」という答申がなされました。ここにはこの数年の間に予定されている幼稚園教育要領の改訂の柱、および今後に求められる幼児教育制度の改革の方向性が示されています。

この答申の中に、「保育カウンセラー」という制度が提案されました。その位置づけは、幼稚園が特別な支援を必要とする幼児に対する教員等へのアドバイス、子育てに不安を抱



える保護者へのカウンセリングなどが必要な場合に、この保育カウンセラーを活用できるように地方公共団体等が方策を講じるというものです。これは今までの幼稚園にはない新たな制度ということができます。

ではこの答申において、この保育カウンセラーとしてはどのような人材の活用が想定されているのでしょうか。この保育カウンセラー制度は、答申の中の地域の人材等の活用という部分で提言されていることから、地域にそうしたアドバイスやカウンセリングのできる人材がいる場合には、その人を地域の各幼稚園からの要請に応じて派遣して対応する制度というように考えられます。

### 保育カウンセラーとして期待されている人材とは

この人材を考える参考資料として、文部科学省が実施している「幼稚園における子育て支援活動総合推進事業」に関する各地域の報告書を読んでいくと、大学の幼児教育や発達心理学の専門家や臨床心理士等を子育てカウンセラーとして派遣している区市町村をいくつも見出すことができます。これは、家庭や地域を対象とした子育て支援制度として実施されているものであり、必ずしも保育制度そのものを対象にしたものではありませんが、大学の専門家や臨床心理士等が人材として活用される可能性を示唆しています。

同様に文部科学省が実施している「幼児教育支援センター事業」を実施している地域の



事業計画書を読むと、保育カウンセラーとしては大学の幼児教育や発達心理学の専門家や元幼稚園教諭で現在は園長となっている人などが選定されています。こちらの相談内容は各幼稚園や保育所の園児たちに対する発達相談や保護者の子育て相談などが考えられているようです。

これらのことから、保育カウンセラー制度が実現しても、その人材としては①大学の保育や幼児教育、発達心理学等の専門家、②臨床心理士や臨床発達心理士などの有資格者、③保育経験のある園長等の管理職、が活用されると予想されます。

### 幼稚園教諭や保育士も登用される道を

保育カウンセラーは、特別支援を必要とする幼児の保育に対するアドバイスと、子育て不安を抱えた親へのカウンセリングという二つの役割を担うことになります。幼稚園や保育所においてこの役割を果たしていくためには、少なくとも次の四つの資質について専門的に精通していることが必要であると思われます。

- (1) 乳幼児の発達や障害について理解していること
- (2) 障害児保育の実践に参加しケースワークの経験を有していること
- (3) 乳幼児の発達相談の経験を有していること
- (4) 幼稚園や保育所における保育実践について理解していること





これらの四つの資質からみていくと、臨床発達心理士や臨床心理士を活用する場合には、(1)と(3)については条件を満たしていますが、(2)と(4)については必ずしも条件に合うとは限りません。その一方で幼稚園や保育所において経験を積んだ保育者であれば、(2)と(4)の条件を満たしている人もいます。保育カウンセラーとして保育経験のある園長の中で、乳幼児の発達やカウンセリングの研修を重ねてきた人が選ばれているという事実もあります。

これらのことから、幼稚園教諭や保育士が発達や障害、ケースワークやカウンセリングの研修を積むことによって、保育カウンセラーとして活躍できる可能性があるといえます。具体的には、保育者が社会人として大学院に入りこうした科目を履修することや、保育関係の学会や保育諸団体が提携してこうした科目の研修を行うことなどによって、保育カウンセラーとしての資格を認定するような仕組みも可能になると思われます。そうした仕組みがあれば、条件を満たしていない臨床発達心理士や臨床心理士の人たちも、こうした認定講習科目から保育実践や障害児保育に関する研修を履修することで、同じように保育カウンセラーとしての資格を認定されることが可能になります。こうした専門家になりたいと思っている保育者に、夢を実現する道を拓くとともに、臨床心理士にも保育実践についての理解を深め保育現場と連携していく道を拓くこともできるのです。

(大妻女子大学)

## 十八世紀ドイツの子どもの本(6)

### 児童書の成立と受容を理解するために

佐藤 茂樹

#### 古い書物との接点を求めて

——これまで五回にわたって、十八世紀ドイツの子どもの本を駆け足で見てきました。十八世紀の書物は、そのまま翻訳紹介しただけではうまく伝わらないものがあります。その原因は、身の回りの品や言葉遣いが変わってしまったという個別的

なものにとどまらず、ある時代の発想に根本的な制約を与える時代の枠組み全体の変化によるところが大きいと思われます。そこで最終回のこの稿では、十八世紀の児童書を踏み込んで読めるための前提を少し論じてみたいと思います。

——ダイジェストで人から紹介されたときには面白そうだった昔の本が、オリジナルを自分で読み

始めたらどうしても先を読み進めなかったということはよくあることですね。へ現在の自分へという制約から、一度自由になって読みたいとは思いますが……。

——時代も文化的背景も異なる書物を公正に読む場合には、テキストとテキスト外の諸条件との相互関係を理解することが特に重要だと思います。

例えば、第二回で紹介したヨーアヒム・ハインリヒ・カンペの『ロビンソン・ジュニア』はドイツ児童書の歴史の中でも比類のない成功を収めた書物のひとつですが、その成功は当時のドイツの現実を無視しては考えられません。著者カンペはこの本の受容者が共有する土台には、それまでにはなかった新しい意識があります。それは、当時のドイツの社会構造の変化に伴って醸成されたものなのです。そしてそのふたつが相まって、児童のために読み物を求めるという以前には考えられ

なかった受容層を開拓し、そのための市場を生み出しました。この点にまず注目しておきましょう。

——では、その社会構造の変化と言いますと。

——まず何よりも小家族を核とした教養市民層の形成を挙げなければなりません。

### 小家族の成立と新しい意識の形成

——ここでいう「小家族」とは、もちろん人数に重きがあるのではなくて、構成が両親と子どもを軸にするという意味です。それがどれほど意識の変化にとって決定的なことであるかを知るために、先に産業社会以前に支配的であった大家族制を見ておきましょう。

産業社会以前の家内制手工業に従事する大家族制は、寝食を共にする徒弟、奉公人等を含んだ生産共同体であることにその本質があります。ここ

では住と職が同一の場で営まれ、家族の一員は同時にその生業を分担する一員でもあります。大人と子どもの間は、年齢に応じたその都度の能力の差こそあれ、連続しています。これは、幼年時代をどう位置づけるかに決定的な影響を及ぼすと考えられます。つまり、この家族形態の下では、子どもはあくまで近い将来に労働上同等の役割を担うべく大人の予備軍にすぎません。

———ということは、子どもは早く大人になることだけを求められている、という意味ですか。

———ここからは、幼年期を単なる大人への途上から切り離れた固有の時期と捉える考えが生じにくいということなのです。

———お話を先取りすれば、幼年期を固有の意味をもった時期と捉える意識は革命的なもので、市民社会の小家族制の下ではじめて芽生えたということだと思いますが、それでは、この小家族という

形態のどこにその要因は求められるのでしょうか。

———その要因は、何よりも職場と住居の分離に求められます。これによって家庭は外部から切り離された完全に私的な領域となったのです。父親が一手に家計を担うものとなり、外部の職場に出勤し、収入をもたらします。母親は留守を守ってアンチームな生活空間としての家庭をアレンジします。こうして家庭の内に役割の分化・分担が生じます。今や生活のための就労から解放された母親には、それによって生じた時間的ゆとりに伴って、子どもに目を配るという新たな役割が生じたのです。子どももここでは就労から解放されていますから、すぐに実際上の役割を引き受けることは求められなくなります。子どもは、将来自分たちの階級の理念を継承すべく必要な教育を受けながら自己形成を行うことが求められる存在となり



ます。ここから「幼年期」を独自の時期と捉え、独自の意義を付与する考えが生まれるのです。これは、特にルソーの影響を受けた教育論に言葉を与えられたことは事実ですが、現実的にはこのような家族構造の変化とそれに伴う新しい意識の形成が与っているという点が重要なのです。

——そうして教育が論じられる環境が整ったわけですね。

——その通りです。そして「子ども部屋」という言葉がこの時代には独特の意味を帯びたものとなります。それは「階級固有の良き教育」と同義であり、単に子どもに与えられた独立の空間という以上に、市民階級の子どもの社会化の場所という役割をも合わせもつものとなったのです。この「子ども部屋」に対応するマイナスの符号をもった言葉が「路上の子ども」で、この言い方のうちに、市民階級にとっていかに子どもを外部から保

護・育成する場所と考えられていたかが窺えます。そして、教育が家庭教師を雇うことのできる裕福な層からさらに市民階級内に一般化するに伴って、この「子ども部屋」のために印刷した教材への需要が高まります。それが児童書の市場の形成へとつながるのです。

——職住の分離によるアンチームな私的空間としての家庭の成立、それに伴った「幼年期」を固有の意味をもった時期と捉える考え、その時期にふさわしい教育の与えられる場としての「子ども部屋」の成立、そしてそのための教材の需要。十八世紀に児童のための書物が普及するコンテキストはこれでひとまず理解できました。以上概略をうかがった上で改めてお聞きしますが、ドイツの児童書を考える上で、では主としてどのような理由からこれまで述べられたことが共通認識とならねばならないのでしょうか。

——それは、ドイツの啓蒙時代の児童書が、いや単にこの時代に限定されないのかも知れませんが、直接に児童ではなく両親や教育者に向けられ、彼らのフィルターを通して子どもに語られたからなのです。つまり、個としての人間の表出ではなく、まずは公共の教育の書として構想されているということなのです。そしてこの教育の目指すところは、〈市民にして人間〉という啓蒙思想の理想像の形成に寄与することであり、その意味でカンペのロビンソン物語はひとつの典型をなしているのです。質問に沿って言い換えれば、次のように要約できると思います。児童書の普及には、〈幼年期〉という時期を固有の意義をもったものとして認識する新たな意識の形成が不可分である。そしてそれはひとつの階級のディスコースなのですから、その意味でそれを形成した社会構造の変化が独立した個の表現である大人の文学の

場合よりもより顕在化した形でこの時期の児童書には読み取れる。だからこそ、テキスト外の諸条件との相互関係こそ共通認識とならなければならない、ということになりましょう。

### 教育の世紀と児童書

——社会構造の変化に伴って生じた新しい意識にはルソーの影響を受けた教育論が伴走しているということに先ほど触れました。そこで次に、この時代にはどのような理由で市民階級と教育が密接に結びついていたか、さらにその教育がなぜ虚構の物語と結びついたかをお聞きたいと思います。

——市民階級と教育の結びつきからお話ししますと、それはこの階級の解放史と関係しています。十八世紀ドイツの市民階級は形成途上の階級です。これから自己のアイデンティティを確立し

ていかなければなりません、世襲的に継承する具体的なものをもたないこの階級は、その抛り所を貴族のように血縁・出生に求めたり、農民のように土地に求めたり、ギルドの職人のように独占化した職能に求めることもできません。しかも政治的に力を発揮する可能性を制限されていたために、他の階級に対してその理念的な独自性を主張して差別化を図ろうとする自意識がそれだけ強いものとなったのです。

——宮廷と貴族が支配的な社会の中で、市民階級は権力に代わる自己評価という目標を追求したわけですね。具体的には、何が自己評価の軸となりますか。

——徳とモラルです。これらはもちろん生得のものではありませんから、市民が市民であり同時にそれが普遍的な人間の在り方につながるものなら、努力して自己形成し、教育によって次代に継

承しなければならなかったのです。ある人は、「思考および行動様式としての〈市民性〉」という言葉には、つねに努力的な響きが伴う」と言っています。そしてそれは、「業績に基づく地位が、地位的優位を出生とともに与えられている支配的階級において認知されるための強いられた努力の結果である。知識、能力、道徳的統合性、それどころかその優越性といったものは、社会的ハンデを完全に止揚するのではないにしても、やわらげるはずのものであった」とも述べています。教養は、ここで述べられているように、政治的な無力等に対する代償としての役割を果たしていたわけです。

では、下の階級に対してはどうだったかというと、まず何よりも非肉体的労働に従事しているという点が強調されます。市民階級に数えられる当時の職業のリストを見ればわかるように、それら

に従事するためには技能の養成とは異なった総合的な判断を可能とする独自の知的養成の過程を必要とします。その意味で、それらの職業に従事していることは、実際のな権威に結びつくものでなかったにせよ、何らかの人格的「希望」を伴うものでありました。逆に言えば、非有産階級にとつて、教養は市民階級の一員であることを認知される方途でもあったのです。

市民階級は、他の階級の労働を収奪せず、また他の階級の労働を評価できる自分たちの徳目こそ普遍人間的な徳目であるという確信に支えられていました。「市民」であることは、同時に言葉の本来の意味で「人間」であるということを表すものでなければなりません。教育は、その「市民にして人間」という自己形成を実現すると考えられたからこそ、この階級の努力の中心の座を占めたのです。

——なぜ教育と例えば『ロビンソン』のような虚構の物語が結びついたのでしょうか。

——先ほどの家族形態の違いに話は戻りますが、大家族制の下では子どもは大人の労働と職業に直接的な関係をもっています。家族の生業を見て、ともにそれを分担する中で将来の職業的な役割に導き入れられ、それに必要な技能を自己同一的な学習を通して身につけたわけです。ここに大家族制の子どもの大人の社会に対する関係の本質があります。これに対して職住の分離に本質がある市民階級の小家族制の下では、子どもの経験領域は労働世界との直接的な接触を免れている点にこそ利点を見出しているわけですから、このような形で社会化を達成する可能性ははじめから排除されているのです。そこで、家庭の範囲を越える諸事情をふたたび「媒介的」に家庭に取り戻して子どもに近づける手段が必要になります。裕福な家



庭は特権的な教育手段によってそれを達成できたわけですが、ただしここには広範囲な普及という問題が残ります。

——そこで新しいメディアとしての書物がそれに取って代わるわけですね。

——少数数による理想的な教育には、需要と供給の両面で限りがあります。そうした実践から出発した博愛主義者たちも、自分たちの理想とする教育をより多くの子どもたちに近づけなければならぬという課題に直面します。現実にロビンソン物語の〈父〉のような有能な教育者を雇うには、経済的に裕福でなければなりません。しかし、理想的な教育の実際が物語の形で〈公開〉され、読書を通じてより多くの子どもがいわば仮想体験するような形でそれに与れるとしたら、少数数教育のもつ利点が伝達されると同時に致命的な限界が一部なりとも越えられることになります。こうし

て、より広範囲な経験の仲介の実現が教育と書物を結びつけたわけですが、そこで、ではなぜ教育がとりわけ虚構的物語と結びついたかという先ほどの質問が残ります。それに一言でお答えすれば、虚構のもつ情緒的な一体化と模倣衝動を惹き起こすという要素に特に博愛主義的教育者たちが注目したということなのです。ここに虚構的物語が子どもにとつてこれほどの規模で以前にはもつていなかったひとつの機能を獲得するのです。すなわち、子どもにはもはや直接的に到達できなくなった経験を仲介する重要なメディアウムになったのです。

——市場の形成がこれに続くわけですね。

——特権的な教育を享受できる家庭で、それに携わっていた家庭教師には時間的余裕があり、教材は自作でした。それが、教育の印刷物による〈公開〉ということになりますと、需要を生み、市場

を形成することになります。事実、十八世紀の六〇年代後半には突然の児童向け出版の増大を見ます。そして八〇年代にはそれが頂点に達します。

この度の連載で取り上げた書物の出版とちようど重なっていますね。教育の普及に伴って需要が拡大し、読書の形態もこの頃から一書反復精読から多読へと変化していくことも付け加えておきましょう。

### 連載を終えるに当たって

——今回ご紹介した書物は、啓蒙思想の色合いが濃いものとなりました。それはこの世紀の特色でもあるのですが、同時にまたそれ以外のものは今日まで残っていないという事実をも意味しています。子どもの本は、成長に伴って読み捨てられるものなのでしょう。啓蒙色の濃いものは、いわば社会公認のプログラムであったという事情が幸い

して親や教育関係者などの手によって豪華に製本され、古書市場を通じて一部が今日まで伝えられています。それでも、公共機関等が本格的に所蔵に乗り出したのは、それほど昔のことではありません。そこに行けば十八世紀の代表的な児童書の現物を一覽できるような機関の実現も夢のままでしょう。そんなわけで、世紀の全体像を把握し、紹介するのはわたしの力を超えていることをお断りしておかなければなりません。

——最後に、今回の紹介から漏れたうちから代表的なものを挙げるとすれば、どんなタイトルがあるでしょう。

——まず第一に、十八世紀児童書の代名詞ともいえるクリスティアン・フェリクス・ヴァイセの児童誌『児童の友』を挙げなければなりません。一七七六年から一七八二年にかけて二十四部三百六十二篇が刊行されました。「親愛なる読者のみな

さんの中には、きっとヴァイセの『児童の友』を読んだことのある人もいるでしょう。自分自身では読まなくとも、ご両親は読んだことがあるかも知れません。二十年から三十年前には、ドイツではこの本ほど人気があって、よく売れて、読まれた本はなかったからです。ヨーロッパの他の国々でも知られ、評判を呼んでいました。子ども時代



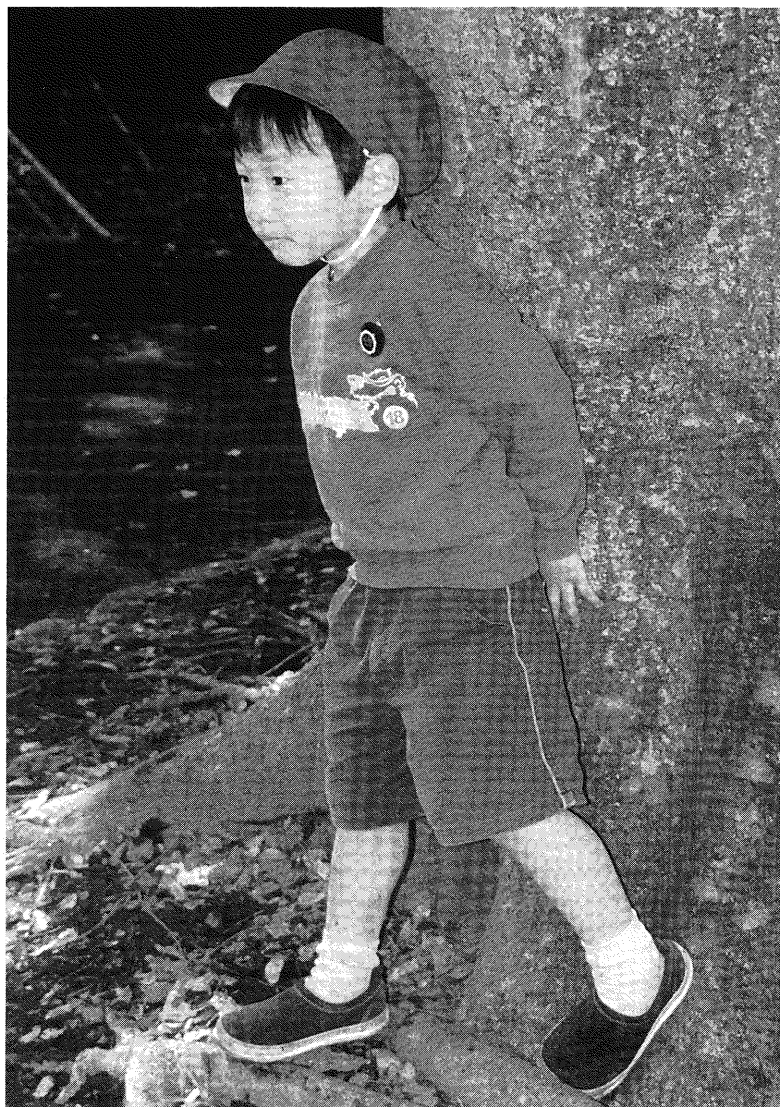
のわたしにも、彼の『児童の友』と『児童の歌謡集』は為になつて楽しい幾時間かを与えてくれたもので、心から感謝しています」とは、後年自分でも『新児童の友』を編んだ人の言葉です。この言葉に見るように、数々の後継書の雛形になりました。他には、選択に迷うのですが、年少児童向けのいわゆるABC入門書、女子児童向けの雑誌・単行本など特徴的な分野がまだ

まだ残っています。ひとつ選ばなければならぬとしたら、フリードリヒ・ユステイアン・ベルトウフの彩色のきれいな『子どもの図鑑』（全十二巻）かも知れません。

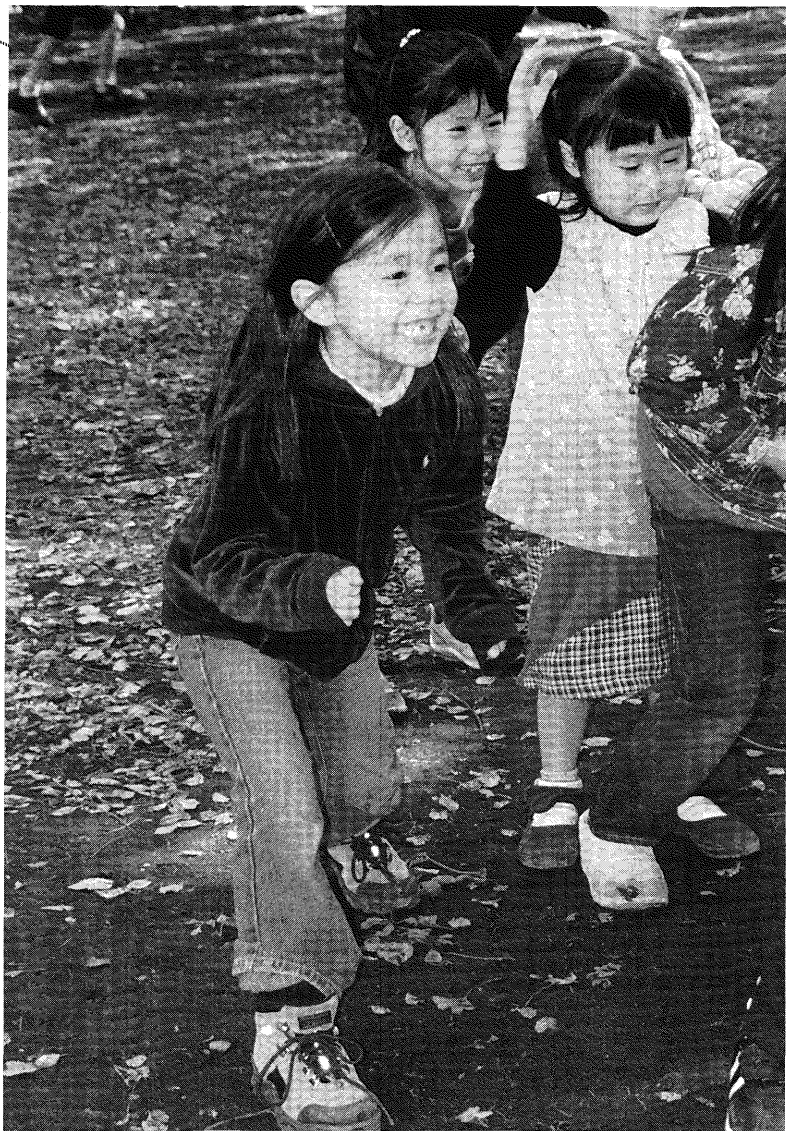
（関東学院大学）

☆この連載は今回で終わります。

# ある日







撮影・平野 清

# 保育の場とジェンダー

金子 省子

## 「ジェンダー」をめぐる動きから

ジェンダーという言葉は、社会的・文化的性別の意味で用いられているが、近年ジェンダー（・フリー）バッシングが強まっているといわれる。こうしたバッシングのなかには、ジェンダー・フ

リーを、生物学的差異を無視し、あらゆる性区分を機械的に消滅させるものと捉える誤解がある。しかし、ジェンダーに敏感な視点をもつことは、生物学的差異を無視するのではなく多様なあり方（その人らしさ）を尊重する立場に立つことに他ならない。教育についていえば、ジェンダー・フ

リーの教育実践は、教育の場を男女平等にする側面とジェンダーに敏感な視点をもつ主体を形成するという側面をもち、両者は相互にかかわりあうものである。

### 保育の場を取り上げることの意味

三歳前後には、「女／男」というカテゴリーの存在と自身がどちらに属するかを知り、男性あるいは女性について人々が共有する信念であるジェンダー・ステレオタイプ（外見や態度、興味、心理的な特性、社会的な関係、職業などについての情報が含まれる）について理解し始めるようになる。そして、幼児期のジェンダー形成にかかわるものとして、親をはじめとするおとなや周囲の子ども、玩具・日用品、絵本・テレビなどのメディアが指摘されてきた。しかし、日本で保育所・幼

稚園のような保育の場そのものを取り上げた研究は多いとは言えない（註1）。出生直後から「女児／男児」に期待され準備される養育環境は異なり、その影響を受けているにもかかわらず、乳幼児期にはこれにより形成される差異に関心がはらわれにくいことや小学校段階以上に比べ、保育者の言動などの外部からは見えにくい領域がより大きいことも、保育の場のジェンダーを捉える困難さとなっている。

保育所・幼稚園は、集団において、「女児／男児」という区分が具体的に示されるなど、幼児のジェンダー形成に影響を及ぼすと考えられることから、その実態を明らかにすることが重要と考えられる。ここでは、保育の場とジェンダーについて、保育環境と保育者のジェンダー観に焦点を当てて考えてみたい。

## 保育環境と保育者のジェンダー観

### — 保育の場にみられる性区分と

#### これについての保育者の意識—

保育所・幼稚園に家庭からもち込まれるものにはすでにジェンダー・ステレオタイプが指摘できる。ただ、これにあてはまらない場合があるにもかかわらず、保育者によって表現される子ども像には、やはりステレオタイプを指摘できる場合がある。筆者らの調査（註2）をもとに、保育環境の性区分の実態の一端とこれについての保育者の意識をみてみよう。

子どもを取り巻く物的な保育環境としては、名簿をはじめとし、園が用意する用品類が含まれる。筆者らの調査した地域では、保育所のほとんどは「男女混合名簿」であるが、幼稚園では「男

女別名簿」が五割を占め、「男女混合名簿」は約四割、他に「両方の名簿」をもつ園がみられた。

靴箱などの配置も保育所のほとんどが「男女混合の配置」であるのに対し、幼稚園では靴箱・ロッカーなどが「男女別の配置」や「男女ペア」になっている所が五割程みられるなど、幼稚園と保育所で大きな違いがあった。幼稚園と保育所の目的や入園方法などの違いが反映されている面もあるが、結果として幼稚園で性区分がより多くみられた。

物的環境の他、保育者の指示による男女別の「日常の集合」や「式の際の集合・整列」は、全体に頻度は低いものの、対象地域の幼稚園と保育所では幼稚園の方がより行っている傾向がうかがわれた。

保育者は、物的・人的環境の性区分を望ましい

ことと評価しているわけではなかったが、改善したいという意見はほとんどみられなかった（註3）。慣習として認めるほか、子ども自身が理解しやすく、保育者が活用しやすい分類とみなされて使われており、「男／女」の理解は発達上必要なことであるという意識のもとでの使用も一部にみられた。

#### —保育者のジェンダー観—

保育者を対象とした先の調査結果から保育の場にかかわる保育者のジェンダー観をみてみよう。

保育者は、幼児期の身体的能力や興味関心などの性差については、特に差がないものと捉



えていた。一方で、子どもへのかかわり方として、「女らしく男らしく育つように」への賛意は低く、「できるだけ同じように扱うが身体的違いに配慮する」ことは肯定的にみられている。また、「男女同じように扱い差が生じないようにする」や「すでにできつつある違いをなくすため積極的に働きかける」ことについても肯定的な傾向がみられた（註4）。最も支持されたのは「子どもの自主性・個性を最優先する」であるが、このような姿勢が、もしバイアスを是正する積極的なかわりの必要性についての認識を欠く場合には、ジェンダーの再生産を問題として意識化できない危険性があると考えられる。子どもが多様なあり方を肯定されるとともに、ジェンダー・バイアスに気づくことのできるような働きかけが必要であろう。ジェンダーに関するワークショップを数

多く行ってきた峯田（註5）は、子どもから発せられるジェンダー・バイアスを含む発言も、「言ってはいけないこと」と否定するのでなく、共に考え、多様な考えに触れる姿勢で臨むことで、子どもの中に気づきが生まれるとしている。

今回の調査では、保育者のジェンダーやジェンダー・フリー保育に関する授業・研修などの学習経験をもつ場合、バイアスを是正するような保育者の積極的なかわりを肯定する意見が明確になることがわかった。

子どもも保育者もそれぞれに、性別期待を受けて成長してきている。そこで自明視してきたジェンダーにかかわる事項を「おかしい」と否定されるのではなく、多様な受け止めをしている様々な人々のいることを知り、「あたりまえ」を捉え直すことのできる学習機会が保障されることが必要

なのではないか。ジェンダー視点からの問いは、保育者にとってもジェンダーのとらわれに気づき、これに向き合うことといえるだろう。男女混合名簿を導入すれば問題が解決したかのような誤解すらある現状（地域によっては導入を後退させる動きがある）をみると、保育環境をジェンダーの視点で細部にわたり見直すと同時に、「分けない」対応に終わらない努力もまた保育者に求められている。そのような保育者を支える情報提供や教育・研修がすすめられなければならない。

（愛媛大学）

#### 註

1 山梨県立女子短期大学の取り組みは、この点で先駆的なものであり、保育者養成を行う大学が中心とな

り地域とともに進めた実践研究である（山梨県立女子短大研究プロジェクト&私らしく、あなたらしく\*やまなし編著 『0歳からのジェンダー・フリー』生活思想社、二〇〇一）。

2 二〇〇四年七月から九月にかけて、m市を中心とし、保育所・幼稚園の主任を対象とした保育環境に関する調査を行い、七十二園より回答を得た。このうちの保育所二箇所、幼稚園三箇所に対しては、全保育者・保護者を対象とした質問紙調査を行った（金子省子、青野篤子「保育にかかわる保育者のジェンダー観について」日本保育学会第五十八回大会発表論文集244頁245、二〇〇五）。

3 保育者調査では、「靴箱の配置」「物品・教材」「ほめ方・教え方」「手伝い」「呼称」「グループ分け」「集合」「着替え」といった事項について頻度と望ましさをそれぞれ五段階で聞いた。最も頻度の高いもの、最も

望ましいという回答が五点となるよう得点化した。望ましさで最も肯定的な「呼称」でも、 $M \parallel 2.64$ であった。

4 各項目について、「1. まったく望ましくない」から「5. 非常に望ましい」までの5段階で聞き、最も肯定的な回答が五点になるよう得点化した。「女らしく男らしく育つように」( $M \parallel 2.38$ ,  $SD \parallel 0.85$ )、「できるだけ同じように扱うが身体的違いに配慮する」( $M \parallel 4.45$ ,  $SD \parallel 0.78$ )。また、「男女同じように扱い差が生じないようにする」( $M \parallel 3.91$ ,  $SD \parallel 1.07$ )「すでにできつつある違いをなくするため積極的に働きかける」( $M \parallel 3.85$ ,  $SD \parallel 0.98$ )「子どもの自主性・個性を最優先する」( $M \parallel 4.64$ ,  $SD \parallel 0.71$ )

5 峯田美香氏は、NPO法人アートフルFの代表で、独自の教材開発やワークショップを行っている。

# 現職教育にむけて

大戸 美也子

——今春、お茶の水女子大学で、保育に従事する現職者を主たる対象に、資質向上のため最新の専門知識や保育技術の学習機会を提供する新しい試みが始まりました。まず、この特設講座の概要について、簡単に紹介いたします。

大戸 この講座の正式名称は、「お茶の水女子大学・アプリカ特設講座『チャイルド ケア アン ド エデュケーション——子ども幸せ学の探求——』」です。ご寄付をいただいているアプリカ葛西社

は、大阪に本社のある育児・介護用品の開発・販売会社で、特にベビーカー、チャイルドシート、子守帯、ベッドなどの生産で高い実績があります。この会社の創業者である葛西健三氏（現 代表取締役会長）は、非常にユニークな方で、一九七〇年代後半より自ら「アプリカ育児研究会」を主宰し、医学、特に脳科学の知識に基づく育児用品の開発に努めておられ、九〇年代からは「心の育児教室」や「あたたかい心を育てる運動」を推進しています。



二〇〇〇年には「国際育児幸せ財団」を設立して育児の教育・環境を国際的に研究し、人間の幸せについての学問的体系を創り上げようと尽しておられます。もともと社会事業に関心が深く、更生運動をライフワークとし、また漫画家の手塚治虫氏が破産したときに救済したことでも知られた方です(巽尚之『鉄腕アトムを救った男』実業之日本社 二〇〇四年)。

その葛西氏が、「あたたかい心をもった保育者を育て、子どもたちに幸せをもたらすような講座を立ち上げたい」と熱望され、保育研究に長い伝統をもつお茶の水女子大学に声をかけて下さったのが発端です。

一方、お茶の水女子大学も平成十六年度から独立行政法人化し、大学経営の体制が変わり、外部資金の導入に関心が強まりました。こうした事情を追い風として、この講座が誕生したといえます。ただし、全く偶然的の産物というわけではなく、今から三

十年ほど前に、お茶の水女子大学の旧家政学部・児童学科に「幼児教育現職教育」という科目が設置されたことがあります。そのときに、津守眞名誉教授、本田和子前学長、当時の附属幼稚園教頭堀合文子先生、それから私も加わって、現職教育を行っていました。対象は限られていましたが大変評判がよく、九年ほど続いた後、惜しまれながら休講となっていました。本田前学長も、そのとき現職教育の重要性を十分認識されており、今回このような形で再開されたのではないかと想像しております。

——次に、講座スタッフと、今年度の受講者についてご紹介いただけますか。

大戸 専任教員は榊原洋一先生と私の二人で、他にリサーチ・フェローと学外講師を十六人お願いして、五月十六日から始まりちょうど一か月たちました。受講生は原則として現職の保育者を対象とし、さらに保育に関心をもつ一般の人たちも受け入れています。大きな特色は、受講者を科目等履修生とし

て入学を許可し、履修すれば単位を与えることです。

それだけに、キャリアアップのためには、大変刺激に富んだ組織的な講座ではないかと思います。



現在、現職保育士二十七名、幼稚園教諭（パートを含む）六名、その他、児童館勤務など保育に関心のある人が二十五名、計五十八名に、本学の学生・大学院生三十四名で初年度総計は九十二名です。年齢は、一番若い方が二十三歳で、最年長が七十二歳と幅広く、園長・主事レベルの管理職から若い保育者まで様々です。ただし、一科目の履修も可能で、全科目を履修する方も数人おられます。

——開講科目はどれも大変魅力的ですね。まず概要をご紹介しますか。

大戸 資格取得のための教育課程にとられない独

自科目が多いのが特色です。

たまたま専任が、小児科医で小児神経学が専門の榊原先生と、保育現場や国際的な保育のことに多少明るい私ですので、「子どもの病気とそのメカニズム」「乳幼児の発達と脳科学」「保育臨床演習」「比較保育学」を開講しました。発達期の子どもを預かる保育の現場では、子どもの発達や病気に対する実践的な知識が必要です。榊原先生の二つの科目は、最新の脳科学に基づく発達や病気の実践知を身につけるよい学習の機会となるはずです。私の担当科目については、後ほど触れますが「育児環境と工学」も目玉科目のひとつです。アップリカ葛西社が育児工学の専門家を派遣して下さり、安全で快適な育児用品・環境に関する基礎的な知識を学ぶ科目を提供できることになりました。赤ちゃんが横たわって居心地のいい位置や大人が世話をしやすい高さ、チャイルドシートの角度などを勉強すれば、保育室の中に無造作に置かれている「もののあり方や意

味」に注意を払い、教育環境を意識的に調整するヒントが得られるのではないかと思います。

さらに、大日向雅美先生、汐見稔幸先生、小西行郎先生など、育児支援・育児行政・赤ちゃん学の第一人者を招き、大きく変わりつつある現代育児の問題点と課題をオムニバスで語り繋いでくださる「現代育児論」、同じく赤ちゃん研究の第一人者である小林登先生には、子どもの幸せについての深い洞察に満ちた「子どもの幸せ学の探究」……。このようなビッグな先生方のお話を連続して聞くことは、めったに得られない機会で、いずれも意義深い授業です。

このほか、絵本・おもちゃ・メディアの最前線の研究を提示していただく「絵本・おもちゃ・メディア研究」、最近問題になっている発達障害の子どもについて学び、保育者自身の障害観を整理し再検討する「障害児保育教育論」、音楽療法について学ぶ「実践音楽表現」、現代食育の理論と実践を学ぶ

「保育と食育」やホームページ作りの基礎を学習する「保育者の情報学」も、内容が充実しています。

特に、「絵本・おもちゃ・メディア研究」の「おもちゃ」担当の森下みさ子先生は、子どもがおもちゃをどのように受容しているかというユニークな切り口で研究を展開している気鋭の専門家であり、メディア研究担当の坂上浩子先生は、NHKの子ども番組のプロデューサーとして第一線で活躍中で、いずれも興味深い内容がいっぱい詰まった科目です。「食育」と「情報学」は、教育課程の改定後、養成のカリキュラムに取り入れられています。が、改定以前に養成校を卒業された方には学習の機会のない科目です。まさにリカレント科目として用意しました。

それから、これら講義のほかに「保育実践研究」という授業もありまして、専任教官とリサーチ・フェローの三人で、一人につき三人から四人の受講生を担当します。担当者の得意とする領域の中から

各自がテーマを決めて、小児医療の現場へ出かけて現場を観察したり、実践の基礎となるようなアンケート調査や観察法、実験法を実際におこなったり、あるいは日常保育の中で気になっている課題を出しあつて事例を読み解く作業を進めています。授業の終わりには、受講生全員にむけて研究の成果を発表する予定で、保育者の実践力をパワー・アップする特色ある科目です。

——初めての受講者を迎えて一か月、反応はいかがですか。

大戸 概して熱心です。授業は昼夜開講し、月曜から金曜までは夜間(午後六時二十分から七時五十分まで)、土曜日は昼間(午後二時から三時半まで)です。あつという間に七時五十分になり、余韻を残しながら終わる感じですね。

最近、保育所へのニーズは非常に高まり、いろいろな役割が期待されています。「男女共同参画社会

の実現」、「子育て支援」、「地域に開く」というように、子どもと向き合つて保育をすること以外にたくさん要望が保育所に集まつてきています。保育士はみんないい人たちですから、社会的要請に素直に応えようと努力するのですけれども、実際にやってみると、どれもものすごく大きな仕事で、みんな「あつぷあつぷ」しているというのが現状ですね。ですから、ひとつ話し始めると、次から次へといういろいろなことが出てくるのですね。

——たとえば、現職の保育者の担わされている課題とは、具体的に何があるでしょうか。

大戸 離婚・結婚を繰り返し、子どもを多数抱えながら、自分が生きていくことに精一杯で子どもに関心がない親。身勝手な大人たちとの生活で荒れ狂う子どもたち。子どもたちが安心して楽しく過ごすことができないよう配慮してある保育室にいてさえ、居心地の悪い子どもたちがいて、保育者は「安定して

そこにいる」ことに多大のエネルギーを注がなくてはならないことなど……今の社会、非常に安定して豊かな「勝ち組」と言われる層の人たちがいる一方、生きるということ自体が非常に重い荷物となっている人たちもいて、社会階層の格差が非常に大きくなってきていますから、それだけ保育のサービスが多様化しているということがいえると思います。

——現代の保護者のあり方について、先生は注目なさっているようですが。

大戸 今年の六月、二〇〇四年度の人口動態統計が発表され、晩婚化・晩産化の傾向が更に進んだことが報じられました。「結婚は三十歳前後、子どもは三十代で」というのです。私どもは「晩産化」に注目して、いろいろ調査してきましたが、講座の受講者にも各園の保護者の年齢層について調べてもらったところ、幼稚園の保護者の年齢は、圧倒的に三十代後半が多く、保育園では、三十代前半が比較的多

い。父親に至っては四十代が二、三〇パーセントを占めていることがわかりました。

保育者からすると、一口に保護者といっても、その年齢は二十代から五十代まで広がり、親子ほど年齢の違う人たちが自分のクラスの保護者としているわけです。ですから、今の保育者は、保護者の関心、教養、嗜好、所属する世代の雰囲気に応じて、まるで違う対処をしなければならないのです。最近、保育者、特に若い保育者から「保護者の対応が難しい」という声を聞くことが多くなってきましたが、保育者と保護者の年齢のギャップという要素があるのかもしれない。「子育てが中年の人たちに担われている」点をしっかり意識して、保育のあり方を考えてみるいい機会ではないかと思っています。

——「中年の子育て」では、何が問題になってきますか。

大戸 大人は四十年生きたと四十年の人生のキャリアが身につきます。しかし、子どもは、いつの時代



でも人生の初心者。だから、「キャリアを積んだ人と人生の初心者が出会いの落差」というのは、所得が高い・低いに限らず、今ま

で以上に大きいのでは、と感じます。以前は、「若くて元気はつらつのお母さんが迷いながら子育てをする」という発想を前提に、保育を考える傾向がありました。しかし、「自分の価値観ができている親」、つまり「分別ある大人」と「無分別な子ども」との葛藤が、今まで以上に大きくなってきているのではないのでしょうか。

そこで、私は「保育臨床演習」という授業で保護者に焦点を当て「今どきの保護者って、一体どういう人たちなのだろう、どういう願いをもって、それを自らの養育力をエンパワーできるだろうか？」ということを課題に進めることにしました。

保護者も子育ての重要な当事者です。本来、その当事者能力を側面から支援するのが保育者の仕事でした。ところが、今は保育者に子育てを任せてしまいう親が少なからずいますので、保育者たちには、「親にもっと力をつけてほしい」という願いが強いのです。ですから、保護者に最低身につけてほしいものを探し出し、身につけてもらって「一緒に子育てやりましょうよ」という基本姿勢のなかでそれを実現する多様な方法を検討しているところです。中年の子育て当事者に必要な保育支援というのは何か、まだまだわからないことだらけで、毎回手探りで進んでいます。「保護者論」とでも言えるでしょうか。多分こんな取り組みは、初めてだと思います。

——そうすると、各国の保育事情に詳しい先生が担当される「比較保育学」も、保育者の支援・親の養育支援という二つの課題に取り組んでいく上で役立ちそうですね。

大戸 「比較保育学」では、日本で今、問題になっていることで、諸外国で既に取り組んでいる事柄を

五つ取り上げ、それらが諸外国ではどんな形で展開しているかを紹介していきます。今回取り上げる五つの課題とは、①教育・保育実践の質の向上に向けての取り組み、②野外保育、③長時間保育、④子育て支援プログラム、⑤幼稚園・保育所の一体的運営の五つで、比較検討してみようということです。例えば④では、北欧、オーストラリア、ニュージーランドなどの取り組みを上げ、日本と違うということを知ってもらいます。海外での子育て支援は、マイノリティ（少数民族や移民）を対象としたものが主流です。ところが日本の支援の対象者は、日本語を話せて、実家も近い、大学も出ていれば、定期収入のある人たちです。日本は、なぜ、このようなマジョリティの人たちの支援に力を入れなければならないのか、そこを問題提起したいのです。私は、今のわが国の子育て支援に対する反省をこめて、外国と

ちよつと切り口が違いますよ、ということを提案したいと思っています。

——現職教育が目指す保育・保育士の理想像とは何でしょう。

大戸 保育というのは、いろいろな人や物や事柄が時計の歯車のようにかみ合つて動いています。いろいろな関係を見ていつて、今、一番しつかり連携していかなければならないのは、保育の当事者である親と保育者が、子どもをめぐって一緒に力を合わせていく、その環境作りが大切ではないかと思っています。一方だけくるくる回るのはなく、保護者とかみ合わせを、今、見直している最中です。

最近、改めて、保育者の大きさを思います。少子化時代が到来し、身の回りに子どもがいなくなつて、大人自体の子どものイメージが貧弱になつてきました。こうした時代には、子どもとたつぷり生活している人は保育者しかいなくなつてきたのではな

いでしょうか。「子どもについて語れる語り部としての役割」が、現代の保育者にあると思います。路地に子どもがあふれていた時代には、保育者にならずとも、普通の大人がいっぱい子ども情報をもっていました。ところが、今、子どもは限られた場所にしかいませんから、いろいろなタイプの子どものたくさん見ている保育者は、この少子社会では貴重な存在だと思のです。ですから、その保育者が子どもについて語るこの意味は、今まで以上に大きい。私は、保育者たちに「大いに語りなさい」と、言っています。「子どもの生態を見て語る」、そういう技を保育の専門性にしてもいい時代ではないかと思うのです。

子どもって、何をやっても時間はかかるし、遊んでしまうし、言ってもすぐに聞かない。保育者は毎日こんな子どもの生態に出会っています。ところがこれから親になる人たちは、こうした子どもの生態を知る機会は少ないし、親になっても子どもを預け

て、ほんの数時間しか出会っていないと、子どもの生態を知らないまま過ごしてしまう。そして、「子どもらしさ」に出会うと我慢できなくなったり、許せなかったり、疎ましくなる。中には、育てることさえ放棄しかねない……。少子化というのは非常に根が深いのです。「子どもを産む・産まない」の問題は、経済力や社会的な安定も関係している。それ以上に、家庭を築いて家族が一緒に過ごすことに、居心地のよさが伴わない社会なら、子どもをもつ必要性が弱まります。男女共同参画を実現している北欧では、零歳児保育を殆どしないし、育児休業を男女とも取ります。親が育児の当事者能力を発揮しています。

——この講座の現職教育の意義と目的について最後にもう一度まとめていただけますか。

大戸 現場の人は必要を満たすことに追われて過しています。今やらなければならないことに、曖昧



でも何でも、とりあえず直感的に判断して応える。いつもそういう個別性と必要性の中で対応するのが保育者。でも、現職教育は、個別性を普遍性に、必要性に十分条件を付加する努力をする機会だと思います。だから、現職教育では、保育者が必要なことδειかにキリキリ舞をしているかということもわかるし、それが不充分なこともわかったという二重の面白さがあるような気がします。

現職教育の意義は、第一に、保育ニーズの強まりの中で、もち切れないほど大きな荷を負わされている保育者の実態を理解し、「出来ること・出来ないこと」を整理し、支援すること、第二に、保護者の変貌に沿った育児支援のあり方を探求することにあります。三十代後半の仕事となりつつある日本の保育事情を理解し、彼らの養育力をパワー・アップする方法を考える。そんな風にあれこれ考え、今、非常にやりがいを感じています。

来年度からは、常設講座の他に、公開講座を充実

させていきたいと計画中です。何十年に一度の大きな保育行政の改革の最中に在って、子どもたちの生活と学習をどのように充実させていくかという保育の基本を守りながら、新しい保育課題、例えば零歳から五歳までの発達と学習の最新情報とか、保育の質を高めるドキュメンテーションの役割と作り方等について学習する特別講座を設け、多くの保育者に公開したいものと希望しています。詳しくは左記にお問い合わせください。

お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター

チャイルド ケア アンド エデュケーション講座

Tel: 〇三―五九七八―五九四九

Fax: 〇三―五九七八―五九四三

E-mail: yoiich@cc.ocha.ac.jp

(お茶の水女子大学)

インタビュー 平成十七年六月十四日 聞き手 編集部

## 私を通った幼稚園・保育園(6)

### 欠席の多い園児だった私

津守 房江

今から七十年前の一九三五年から約一年間を、私は下谷区立（現在の台東区）根岸幼稚園に通いました。三人の姉たちもそれぞれに一年間ずつ通ったと話していますから、当時は小学校入学前に一年間幼稚園に通うことは、私の周囲では一般的だったのでしょうか。私は幼稚園には度々欠席をしましたので、胸を張って一年間通ったと言えません。むしろなぜあのように欠席が多かったのか、そんな状態で幼稚園は私にとって意味があったのか、この機会に考えてみたいと思いました。

## 記憶の中の幼稚園

そのころ私たち一家は東京の下町の根岸の近くに住んでいましたので、私は小さな家々の間を通り、原っぱのわきを通って一人で幼稚園に行きました。園に入る小道の奥に門があり「根岸幼稚園」の看板がかかっていました。その小道は私にとって大事なものであったようで、その小道を一人で歩きながら緊張感や「行く」という決心が強まってきました。賑やかな家から出て一人ぼっちになっても、泣いたことはありませんでした。

古い幼稚園での集合写真を見ると、先生方は着物と袴姿ですし、普段も大体和装でした。私は袴のウールの手ざわりを思い出し、着物の袂に触れた時のひんやりとした心地よさを思い出しました。それらは私の手の甲が憶えていたもので、当時私は手のひらで先生に触れたり手をつないだりした記憶はありません。

だからといって先生方が冷やかな感じがしたわけではなく、いつも子どもたちの先に立って歩くおとなでした。部屋からお遊戯室に移動するのも、先生の指示に従って行きましたが、男の子たちがこの時とばかりに走ったりするのを、ぶつかると怖いと思って先生のうしろについていきました。日支事変の始まる前のことで、馬賊のことが語られているのを聞き、この男の子たちを連想した程、私は男の子の一団を恐れていました。

部屋では自分の席に座って、絵を描くことが多く、自由に歩き回ることもなく、静かに過ごしました。

## 私の違和感・戸惑い

私は五歳ごろまで、四人姉妹の末っ子として家でのんびりと暮していましたので、幼稚園では沢山の戸惑いや疑問に出会いました。一つひとつは取り上げる程もないことなのですが、七十年間も忘れずにいたことは、幼い者にとっては大事なことなのかと思い、心の大事箱から少し取り出してみます。

或る日、子どもたち一人ひとりに木のシャベルが渡され、砂場で遊ぶように言われました。砂場は外廊下の前の庭にありましたが、皆が一斉に入ったのでぎゅうぎゅうでした。私は普段原っぱで石や土で遊ぶことがあったので、張り切って砂を掘り始めました。ところが気が付くと「もう、おしまい」になっていました。私は自分ではほんのちよつと遊んだだけなので驚いて頭を上げて外廊下に立っている先生を見上げました。折角お山が出来かかっていたのに「本当におしまいなの」と無言のまましばらく見ていました。あの茫然としたような体の感覚は忘れません。

家では私が原っぱに遊びに行こうとすると、大抵は姉といっしょだったのですが、母は「おやつには帰きなさい」とか「夕方遅くならないうちに帰きなさい」と言いました。おとうふ屋さんのラッパの音や、空気の変化など、大まかな時間の流れの中でゆったりと遊んでいたのですが、幼稚園では細切れの時間が先生の指示によって決まるのです。

もう一つ思い出すのは、部屋で一斉に折紙を切って短冊を作った時のことです。折紙を

縦に三つに折って切るように先生は言われました。子どもたちは「三つに折って切る」とでざわざわとしていました。先生は子どもたちの前に立ち、むこうを向いてこちらを振り返るようにしながら三つに折ることを教えて下さったのですが、私にはなかなか出来ません。紙の角と角とを合わせて二つに折り、更にそれを半分に折ると四つになってしまいました。先生は先に進んでやっているようなので、私は焦って、先生から教えられたのより少し細いけれど、四つに切っていました。

この日、家に帰ってから一人で折紙をいじっていたら、いつの間にか三つに折れていました。呆気ない気持ちでしたが、私はいつのころからか「せかさないで」と言うようになりました、何でも自分のペースでゆっくりやるようになりました。

私の感じた幼稚園と家庭との違和感は、子どもの時間とおとなの時間との差から出たものと思っています。

### 度々風邪にかかって幼稚園を欠席したわけ

幼稚園で子どもが安心出来る居場所を見つけられないでいる時や、ゆったりとした時間の流れの中で遊べない時、子どもは緊張し、疲れが出てくるのでしよう。私は幼稚園の一、二学期には本当によく熱を出しました。父母は風邪を引いたのだから欠席す



るようにと言いました。大抵は微熱が出てすぐに平熱になりました。しかし父母は熱が下がっても三日は家で安静にするようにと言い、週末になるとついでに休むので一週間は欠席しました。薬のない時代でしたから当時は古い吸入器や湿布や真綿の首巻きなどが、母の用意した風邪と戦う道具でした。特別に床の中でおかゆを食べることが許されました。

こんなに大騒ぎをするのは、私の父母には子どもをなくした経験があつて、いつまでもそのことを忘れないでいたからでしょう。初めての女の子は死産で、次の男の子は一歳四か月の可愛い盛りに失つたといえます。父が北海道の寒い地で油田の技師の仕事をしていた時のことです。子どもの死の後、暫くして仕事を止めて上京したのだそうです。子どもの命を失つたことを深く深く思い続けていたことは、私たちにもよくわかりました。

私が根岸幼稚園に通い始めたころは、父の新しい仕事が何とか軌道に乗り始めたころでした。再出発した父母の意気込みと緊張は家の中に感じられましたし、母は父を助けて家のことだけでなく、仕事もしていました。母はいつも家にいて、殆ど外出をしないことは、私たちの幼い時からずっと続きました。

一方、父には若い時父の兄が放蕩の末、財産を使い果たし、家が崩壊するということがありました。このままでは家族全員がだめになるという時、次男である父には教育を受けさせることになって東京に出てきたといえます。その後米国に留学して住み込みで働いている時、キリスト教の影響を受け、真に清潔な家庭を作りたいと願ってきたそうです。それまでの日本的「家」ではなく「家庭」が日本にも誕生し開花したところかと思えます。

私の家庭は父母の事業と子どもの養育との両輪によって成り立っていましたので、私が幼稚園に通うという姿勢にも病気から子どもを守るという姿勢にもそのころの父母の考え方があらわれていたのだと思います。

### 幼稚園で私の心身の緊張がゆるんだ時 —— おもらし事件 ——

二学期の終わりか、三学期の始めごろのことだったのでしょうか。寒い日が続き、子どもたちの手足に霜焼けができていました。当時は暖房も少なかったもので、幼稚園で霜焼けのひどい子には手当てをして下さるようになりました。手当てといっても、熱いお湯につけてよく揉んで、あとで油薬をつけて下さるのです。私も霜焼けがひどかったもので、別の部屋で数人の子ともと並んで待っていました。私は列の一番うしろにいましたが、自分の順番になって、手を白い洗面器のお湯につけてゆっくり揉み始めた時、知らない間におしっこが出ていました。

それまで私は幼稚園のお便所（当時トイレという言葉は勿論、お手洗いという言葉も使いませんでした）に行った記憶はあまりありませんでした。大抵家に帰るまでは我慢出来ましたが、おもらしをしたことがなかったもので、何が起こったのかわからない位でした。私の下に出来た水溜まりに先生が気付き、小使いさんのおばさんが来て、小使い室に連れていってくれました。下着を取りかえたことの記憶がないのに小使い室の温かさは今も憶えています。土間ではお湯が沸いていて、畳の部屋では小使いさんのおじさんが煙草をキセ

ルで一服していて、普通の家のような雰囲気がありました。

皆といっしょに帰る時、例の門の所に小使いさんのおばさんが立っていて、私に小さな包を渡しながら「はい、おみやげ」と言いました。それまで私は濡らした下着のことを忘れていましたが、その包の中に入っているのだとわかりました。いっしょに門から出て来た友だちが、「なあに？」とたずねた時、おばさんに言われた通り「おみやげ」と答えました。友だちもそれで納得したようで、小さな包を持った私と二人で帰りました。家で母にも「おみやげ」と言って渡した時、母も何も言わずに受け取ったように思います。

私が初めておもらしをしたことは、今考えると、私の心身の緊張がゆるんだ証のように感じられます。後にも先にもないおもらし事件は、こうして私にそれまで見えなかったことを見せてくれました。あの怖かった男の子の一団も、そんなに強くはなくて、一人ひとり違った名前があることがわかりました。

小学校へ行く前の一年足らずの幼稚園で、私は人の中でもそう緊張しないで過ごすことが出来るようになっていました。姉たちではない自分の友だちが出来始めたのも、このころです。

幼児期の春の霞のような生活に少しずつ輪郭が出来、外側の秩序とも出会えるようになってきました。現代の子どもに比べると、何と長い間、霞の中を生きることが出来たことかと思えます。

(保育研究者)



## 地域・子ども・大人の「関係をつなぐ」(3)

小川 清実

### 保育士の役割とは「関係をつなぐ」こと

小川 欲を言うと、「びっぴ」を通して親が育ってほしいと思っています。だから、本当はここに来てくれる親たちがみんな、地域の子育てリーダーになってくれて、どんどん地域がよくなっていくというのが夢なの

ね。それで、たまに『びっぴ』に来てくれて、情報交換したりするのがいいんだけど。

——そうすると、保育士さんの役割は何でしょうか。

小川 最初のころは、保育士さんたちと「何をしたらいのか」と何回も話し合いをしました。ここには、園長先生をやった人、普通の保育所で保育士をやっていた

人、療育センターでお手伝いをしていた人がいます。二人ずつローテーションを組みながらの運営ですけれども、ここでの役割について最初のころはとても疑問があったようです。

最初は役割をわからなかったみたいですが、だんだんと「普通の保育と同じだ」という結論が出てきた。やっぱり、「子どもと親をどう理解するか。ちゃんと見て理解する」ということに尽きるということです。普通の保育所も、子どもと親がいる。地域でも同じで、基本は同じだという発見が、保育士からありました。

——保育士の役割は、結局子どもを見て子どもを理解するだけではなくて、同時に親を理解し、親も育てていくということでしょうか。

小川 そうそう。今、政府からは、それが求められているのね。ところが、実際の保育所の保育士さんたちは忙しいでしょう。やっぱり、最初はそこが難しいみたい。「親を育てる」といっても、なかなかね。本当に必要な

人には手が届かないでしょう。（保育士との話し合いに）来てくれなかったりとかな。

——預けっぱなしということでしょうか。

小川 そう。こういう地域に『びっぴ』のようなものがあれば、親と丁寧に向き合うことができる。『びっぴ』には、保育士さんで、「今、産休中、育休中です」という人も来ている。そういう方が絵本とか紙芝居を読んでいると、「ああ、上手」と思いますね。今日はプロがいると。（本当は保育士だけでも、子どもたちにとっては）誰ちゃんのおばちゃんを読んでも、子どもたちにとっては、参加してくれる。上手にピアノを弾いている人もいます。

それに対して、『びっぴ』の保育士は、そういうことはやらないけれども、親子、子ども同士、親同士の関係を見て、必要と思ったときに入っていくわけ。今、『びっぴ』の保育士さんたちは、「関係をつなぐ」難しさばかり、おもしろさがわかってきていると思います

す。子どももどんどん変わり、親も変わってきているので、保育士さんたちも、やりがいがあると思っっているようです。

以前は、「保育士はいなくてもいいのではないか。単なる受付のおばさんなら、誰でもできるのではないか」と思われていたけれども、今はそうではない。「役割がある」ということがわかってきてくれている。それは、子育て支援の取り組みに携わるすべての保育士の役割ではないでしょうか。

実は、「関係をつなぐ」という役割は、普通のお母さんでもできるのよね。けれども、特に、以前保育園の先生をしていた、幼稚園の先生をしていた方だと、必ず子どもを集めて何かをやるの。子どもを集めて何かをやる、それを期待して親が来る。「子どもを集めて何かしない」と「保育していないよう」に、親が誤解しちゃうのね。ここはそうではない



い。『びっぴ』はそれはやらない。

### 保育学科の学生が子どもと直接出会う場

——ところで、大学という教育機関が子育て支援を行う意義は、どこにあるでしょうか。保育士を目指す方々が、子どもと触れ合い学ぶ機会を積極的に作るということです。新しい時代が求める保育者像とは一体どんなものでしょうか。

小川 ここでは学生たちが直接子どもと触れ合う、親子を知る機会になります。今の学生たちは、赤ちゃんを見ていない。でも、保育士とか幼稚園の先生になりたくて、そのイメージだけで入ってくるけれども、実際の子どもをほとんど知らない。中学校とか高校で、たった一日ぐらい保育園に行くでしょう。それぐらいで子どもを知った気になっていて、「かわいい」ぐらいで、自分は将来保育士になりたいという希望だけはあるけれども、実際は知らない。

私が今までずっと短大などで教えていたから、「子どもの遊んでいるところに行って、観察をして記録する」というのを、宿題で出していたの。そうしたら、あるときから、その観察記録がとれませんということになったの。どうしてかという、その辺で子どもが遊んでいないという事態になったの。それは随分前です。十年か、もっと前かもしれない。

その前は、その辺に、わりと子どもが遊んでいたの。だから、うちの隣の神社でいっぱい子どもが遊んでいるから、そこで観察記録をとればいいという感じだったのが、あるときから、ぶつたりできなくなった。「子どもがいまません」って学生に言われたの。子どもをどこに探しに行ったらいいか。例えば、デパートの玩具売り場に出向いていかないと、子どもがいなくなったのです。わざわざ知り合いの親戚の家を訪ねていくなどしないと、子どもの記録がとれなくなっちゃった。ということは、保育士や幼稚園の先生を目指す人たちが、本当に子どもを見ないでいるということを実感したのです。

ここの学生はいいですよ、親子をいつも見ているから。まだ直接的には、『ぴっぴ』の中では学生に関らせていないのね。というのは、学生は子どもと遊びたいの。親は遊んでほしいの。親も「学生さんはいつですか？」と待っているの。

けれども、ここは「親が学ぶ場」だから、それはさせたくないの、学生を『ぴっぴ』にそろそろ入れるように思うけれども、子どもと遊ぶのではない。絵本を読んだりするのではなくて、玩具の片づけをするといった役割をする人として入る。一緒に遊ぶ人ではない。

でも、親は遊んでほしいのね。ちょっと楽をしたい。それも大事で、ちょっと預けたいという気持ちもわかるけれども、「預けるところは、今、いっぱいあるでしょう。預けるときは、そちらへどうぞ。ここはそうでない場所ですよ」と、いうことです。

### 「保育の専門性」とは「生活力」

——子どもと直接触れ合う機会の少なかった学生さんた

ちに、まず身につけてほしいことは何でしょうか。

小川 私は、学生に「生活力」をつけたいわけ。そのためにはどうしたらいいかというと、「いつも言われたことだけをやっているのではなくて、自分たちで考えて、自分たちで生活できる」という人にしたいと思っています。

保育者は、例えば、何かをすばやくやらなきゃいけないということが、あるでしょう。それも段取りよくやれるように。さらに、感受性豊かな人に育ってほしい。

学生に対しては、昔に比べてレベルが下がったとか、いろんなことを言う人もいるわけ。家庭で育てられる部分が、今はこれだけ育てられていないでしょう。けれども、今までだったら家庭で育てられてきた部分を、学校で育てられるかというと、これはやっぱり限界があるから、いかに家庭と連携していかなきゃいけないかということです。入学式の後、親に話をする機会があるのですが、そこでは必ず、「お嬢さんたちが困らないように、ぜひお嬢さんたちに家事などをさせてください」と頼む

の。でも、やらせていないわね。

秋に文化祭があつて、そのときも親の会があるのね。そこで、「すみません、まだ何もさせてなくて」と言う親もいるの。何もさせていないというのは、要するに何も家事をしていないの。ご飯を炊いたこともない、洗濯もしたことがない、掃除もしたことがない人たちが保育学科に入ってきている。そういう学生たちが、幼稚園に実習に行つて、「クラスの掃除、頼むわよ」と先生に言われても、何を使い、どう掃除するのか皆目見当がつかないわけでしょう。わからなければ、聞けばいいのよね。「どれを使つて、どうしたらいいですか」と。ところが、今の学生の中には聞くこともできない人もいる。

そういう学生たちを「保育の専門性」をもった人に育てていく使命があるわけだから、そのときに、どういふふうに着ていくかということ、「基本的には生活できる力がある人」ですね。昔の人はみんなやっていたことだけれども……。 (笑) だから、「生活」がしっかりとできる人。「生活」ができる人というのは、「すべてバラ

スよく生活する」ということでしょう。そういう「生活」が基本的にはできている人、その上で、子どもの行動を見て、援助できる人ということを勉強していけば、保育の専門性って、そんなに特別のものがあるわけではないと思います。

——「生活力」に対して「学力」が今の日本にあるかというのと、「学力」もないでしょう。

小川「学力がない」のは、「生活力がない」からでしょう。「生活力がない」と、「基本的に学ばなければいけないことが入らない」のよ。何か簡単なものでもいいけれども、それをやらなければ、この「生活」は成り立たないというもの、自分がこれをしなればというものを、みんな一つずつぐらいいはもってやるのが、まず大事だと思いますが……。

今だからこそ、保育者に求められていることがいっぱいあるけれども、「保育の専門性」とは一体何なのか。昔みたいに、子どもを親にかわって世話をするこ

ではないことは確かだけれども、昔も大事にされていて、今も大事にされていることって何だろうと考えたときに、「きつちりと、その人間が人間らしく生きていくように育てる」ことに尽きるわけでしょう。そのためには、保育者自身も、まず「自分の生活」を、立派じゃなくていいから普通にやっていけるような「生活力」をもつことじゃないでしょうか。

### 失われた「生活」

——今の若いお母さんたちというのは、子どもを産んで、初めて「生活」というものに向き合うことになると思います……。

小川 だけど、やっていないから、困っちゃったり、外注しちゃったり、外注が悪いわけではないけれども……。

最近思うのですが、もともと子育てのときだけは、うんと時間がかかるでしょう。普通の時間であれば、たっ

た二年とか三年、三歳で幼稚園へ行けば三年のことだけれども、三年間の、家での一日一日つて、起きてから寝るまで、すごくたつぷりあるわけでしょう。その時間は徹底的に子どもに合わせて過ごす時間になる。その時間の歩み方というのは、大人たちの何時、一日、一時間、六十分という歩みと違うでしょう、同じ六十分でも。大人の時間は、「いかに短時間で効率よくするか」ということをずっと求められてきている。けれども、子どもが小さいうちは、絶対にそうじゃないでしょう。そのあたりのギャップを理解することができない。

——結局、時間認識が合理性と効率を優先する大人の時間へと一回切りかわってしまったものを、そうでない方向には簡単に戻せない。それから、子どもに徹底的に合わせていく生活に適應していく自分自身を待てない、ものすごい焦りがあると思うのですが。

小川 そうそう。そこでい



らつく。そこで虐待が起つたり、子どもがやることを待つてあげられない親というのが本当にいっぱい出てる。私もそうだと思うけれども、効率よく、早くというふうにして育てられちゃったものね。

ひと昔前は、家事もすごく効率が悪かったのよ。それこそ洗濯機がないので手で洗濯していた。それから、今はあまりないと思うけれども、布団の打ち直しというのを家でやったの。布団の打ち直して、すごく時間がかかるのよ。まず、布団側といって、直接綿を包んでいる布を洗う。今みたいに洗濯機ではできない。手で洗って、のりで洗い張りというのをしたの。この間、五十代の人と、そういうのをやったわよねって話をしたの。洗い張り用の長い板がどこの家にもあったわけ。板もせいぜい一枚か二枚でしょう。そうすると、毎日毎日一枚の側を洗濯するのにも時間がかかるわけでしょう。お日様がある日だけのりづけして。それから、布団側をもう一回縫って、ミシンじゃないのよ、縫って、袋を作る。だ

から、一枚の布団を打ち直しするのは大作業なの。一枚の布団で二週間どころか一か月近くかかるわけ。子どもは結構役割があるのよね。

最終的なところで、布団側をくるむときに、「押さえる」というのが子どもの役割。押さえておいてくれないと困るところがあるの。端っこを「びっと」押さえるというのがあったの。五十歳代以上はそういう体験があって、「やった、やった」と話したの。

そういうふうにして、一枚の布団を打ち直しするのも、それだけ時間がかかっていた。子どもはちよろちよる遊びながらも、その子どもの時間と大人の家事の時間は、ゆったり流れるという意味で、結構重なっていたと思うの。

火も全部外で起こして、外で煮炊きするという時代もあったでしょう。今は全部それが電化されて、すごく簡単になって、家でご飯をつくらない親もたくさんいるの、外食で済んじゃうから。あまりにもいろいろなもの

ができていますでしょう。そうすると、効率がいいわけ。お金さえあれば欲しいものが手に入る。そういう生活を大人はしている。ところが、子どもが生まれてから二、三年は、完全にそうじゃない時間というのが必要で、そのところのギャップをどう埋めるか、本当に大問題ですね。

### 子どもが育つていく時間に向き合う

小川 今の世の中で、子育てをするというのは、大変なことなのねと、だんだん思っています。子育てをしている時間は、わずか二、三年だけれども。ゆったりと子どもが育つていく時間というのは、もしかしたら三年もなくて、二年ぐらいで済むことなのよ。そこだけ頑張れば、あとは大丈夫だと思うのね。そう大変でないと思うの。

人間的なやり取り、関り、相手の気持ちがわかるなんていうのは、小さいときの基本でしょう。それがなく



て、大きくなったからわかつてよといっても無理だけれども、そこで親子がわかり合える関係になっていれば、大きくなつてから、あまりひどいことにはならないのじゃないかと思っているけどね。だから、子どもが小さいときの関りは、省エネしてはいけないの。

——『ぴっぴ』の目指す子育て支援とは、支援という形でサービス過剰にならない、子育てを外注させない、不合理的で非効率なことにあえて向き合わせることで、親子で「生活力」をもう一度つけ直していくということでしょうか。

小川『ぴっぴ』で、本当に「ゆつたり」と過ごしていく親子もいるのね。ゆつたりと過ごして、「ああ、こういう時間があつていいな」という実感があると、子育てが変わる。「こんなふうに子どもと関ることが、家では難しいですよね」とお母さん方は言います。そうだと思う。家では、「さっさ」と何かをやりたいわけでしょう。だからこそ、今、家じゃなくて、こういう場所って必要

だと思う。家でやるのは難しいのね。

—— 本当は、子育て真つ最中の親子だけではなくて、日本人みんなに必要な場所かもしれないですね。余裕のない慌しい日常に追われているわけだから。

小川 本当にそう思う。だから、確かにまだまだいろいろな課題はあるけれども、『ぴっぴ』にいるだけで、私自身とても癒されます。『ぴっぴ』では、子どもが、「こは僕たち、私たちが守られている場所」というのがわかるから、ものすごく笑顔が出るの。にこにこしている。子どもが誰にでもにこにこしてくれるの。にこにこされれば、やつぱりににこにこするでしょう。それでほんとできるというか、そういう場所にはなっているわね。

(東横学園女子短期大学)

聞き手 首藤 美香子

☆この連載は今回で終わります。

# 保育におけるケアと保育者のゆらぎ

— 研究者を志すものとして —

横井 紘子

はじめに

日本保育学会が大妻女子大学で開催された。大変綺麗なキャンパスで、その設備を少し羨ましく思いつつ、目当てのシンポジウムの会場を目指した。

今回の企画シンポジウムⅠ・Ⅱ・Ⅲには「傍ら」という言葉が入っている。私は企画シンポジウムⅡ

「こどもの傍らに近づくために—実践研究の方法—」を聞かせていただき、保育実践の場をフィールドとし、そこに介入して研究していくことは何を意味するのか、そこでは何が生起しているのか等について、パネリストの先生方のお話を聞いた。シンポジウムの後、自分で考えをめぐらせている間に、尾崎新先生と大場幸夫先生の対談である「ケア・ワー

クとは何か―現場でゆらぐことの意味―」が始まった。そのままお二人の先生方のお話に聞き入り、あつという間に時間は過ぎてしまったが、対談が終わった後に、自分の考えがストンとまとまっていく感覚を覚えた。

本稿では保育学会において、企画シンポジウムⅡ「こどもの傍らに近づくために―実践研究の方法―」と対談「ケア・ワークとは何か―現場でゆらぐことの意味―」を聞いた経験から、私が感じたことを記しておきたいと思う。

### 子どもの「傍ら」にあるために

最初に、私自身がどのように保育現場と関わっているのかを簡単に紹介させていただく。大学院生である私は、週に一回、都内の幼稚園にフィールドワークに入らせていただいている。また、午後は預かり保育の援助スタッフとしてボランティアを行って

いる。幼稚園における私の立場は、しばしば諭えられような、「壁」や「透明人間」などではない（なろうと思っても、なれるものではないと思う）。できるだけ客観的に子どもの姿を見ようと努める時もあるが、求められた時には子どもや保育者と積極的に関りながらフィールドワークを行っている。その幼稚園に関らせていただくようになって三年目になるのだが、自分がフィールドにおいてどのような位置にいるのか不安に感じることもよくある。また、研究者を志すものとして、子どもの側にいる大人として、常に子どものありのままの姿を捉えようと模索しているのであるが、今回の学会のキーワードでもある子どもの「傍ら」に私はいることができているのかも不安である。そもそも、大人として子どもの「傍ら」にあるとはどういう事態なのであるのか。まだ私には、この「傍ら」という言葉が何を意味するものなのか、保育学会が終わった今でも自分

の中で咀嚼できていない。

しかし、学会において先生方のお話を聞く中で、子どもの「傍ら」としてあるためには「ゆらぐこと」が必要な事項ではないかと感じた。「事項」というよりも、「傍ら」にあるための「基盤」「根っこ」を形成するために「ゆらぐこと」が必要である、と言った方が表現は適切かもしれない。「ゆらぎ」とは、尾崎先生のお話によれば、「葛藤、不安、無力さ、わからなさ、問いと出会うことによって引き起こされる感情や体験」のことである。この「ゆらぎ」がなければ、効率化を求めた結果、人をシステムや制度の中にあてはめ、一人の人間として人を人として感じることもできない、非常に虚しい、恐ろしい事態に陥ってしまうであろう。

しかし、「ゆらいでばかりではよくない」とも尾崎先生はお話しされていた。また、ケアは、『受け入れる』のではなく、『受け止める』ことである

とも先生はおっしゃっていた。では、「受け入れる」ことと、「受け止める」こと、この違いは何であろうか。

私自身まだ両者の違いを明確に示すことができない。しかし、最も違うと感じることは、「受け止める」場合には、「受け止める側」と「受け止められる側」に、はっきりとした差異―他者性―が認められるということである。このことは、「受け止める側」が「受け止められる側」を、単に他人として区別しているということではない。そうではなく、保育ならば、子ども（「受け止められる側」）の独自性



や、子どもがある個人として、かけがえのない人格をもっていることを意識し、尊重することであり、それは同時に、保育者自身（「受け止める側」）も自分がそういった人間だと感じることである。この差異があるからこそ、子どもを「受け止める」ことができ、「傍ら」にいろことができるのではないだろうか。

そして、この差異を失ってしまうと子どもを「受け入れる」ことになり、「受け入れる」というと、聞こえはいいかもしれないが、これは、言いかえれば、子どもを自分（保育者）に引き込んでしまう事態を表しているように思われる。つまり、子どもを自分の枠組みでしか捉えられなくなってしまう事態、子どもを一人の独自の人間として感じられなくなってしまう事態である。そして、「ゆらいでばかり」の状態も、一見逆のこのように思われるが、子どもに侵食されてしまう状態、保育者が一人の独

自な存在であるという意識を失ってしまう状態を示しており、差異を感じられなくなっている点では同様のことであるように思われる。よって、「ゆらいでばかり」の状態から脱し、自分自身を独自の存在として尊重でき、更に相手を「受け止める」ことが可能になるために、また、相手を「受け止め続ける」ために、「ゆらぐこと」が必要になってくると言えるのではないか。

尾崎先生は「ゆらいで、ゆらいで、その結果としてゆらがない信念がある」と指摘されており、「ゆらぐこと」によって、「土台」「根っこ」ができるというイメージを抱かれているようであった。また、それは「液体から固体への変化」ということではなかった。これは「ゆらぐこと」が積み重ねられた結果の「信念」ができあがったからといって、途端に「ゆらぐこと」が必要なくなったり、できなくなったりするわけでは決してないことを示しているのだ

はないか。むしろ、その後に「ゆらぐこと」がなければ、「根っこ」は腐ってしまうのであろうし、「受け止める」ことは出来なくなってしまうであらう。尾崎先生はベテランの保育者の姿として、「ゆらぐことができる」、「ゆらがなない信念をもっている」、「若い人に『ゆらいでいいよ』と言える」という三つの事項を示しておられた。

シンポジウムⅡにおいても、「ゆらぎ」という言葉こそ明確には使われていなかったが、同じような経験が先生方のお話の中にいくつか示されていたように思う。石黒広昭先生は「子どもと大人の協働問題生成過程としてのドラマプレイ」として、学生が子どもと遊びを作り上げていく事例を紹介された。

その中で石黒先生は学生側が「準備しすぎない」ことが重要であると指摘されていた。さらに、学生が子どもと共に遊びを生成していくためには、子どもを「一般化・客観化」するのではなく、子どもと関

る中で、「違う視点を得ることによって自分（学生）の思いを揺さぶる機会」が重要ではないか、とおっしゃっていた。石黒先生が提供なさった事例での学生たちも、「ゆらぐこと」を体験し、時には、自分自身の無力感を感じながらも、子どもを「受け止めて」いったのではないだろうか。先生の「準備しすぎない」という指摘は、「ゆらぐこと」ができる隙間を、学生にも子どもにも残しておくことが必要である、という指摘でもあるように感じられた。

### 研究者として「ゆらぐこと」

「ゆらぐこと」が実践者である保育者において重要な事柄であることは、ほんやりと理解できたのだが、現場に赴き、子どもと対峙している研究者として「ゆらぐこと」とはどのような事態であり、何を意味するのであろうか。

研究者として現場に赴く場合には、少なからず、

何か「データ」となるものを取りにいかうとする。

また、子どもにまつわる様々な学問を背景とした理論があり、研究する上ではこれらの理論に立脚する場合が多い。研究者自身、それらの理論や自分自身の経験から子どもや保育に対して何かしらの考えを抱いており、それに基づいた問題意識や仮説をもって現場に關つていくであろう。

しかし、たとえ研究者であっても、現場において実際の子どものありのままの姿を捉えようと真摯に努めるならば、これらの理論的枠組みや経験則に基づいた既存の枠組みのみでは子どもの理解に至ることは不可能であり、必然的に「ゆらぐこと」になるのではないか。真の意味で子どもの「傍ら」にあり、子どもと共にあるならば、少なくとも子どもと向き合っている間においては、研究者の枠組みは一旦横に置いておかなければならないし、必然的にそういういった状態になっているはずではなからうか。既

存の枠組みに意味がないということは決してなく、それがなければ「ゆらいでばかり」の状態になってしまう。しかし、子どもと向き合いながら、既存の枠組みや理論に目の前の子どもをあてはめていくことは、子どもの理解においても、同時に研究においても、何も生み出さないように感じる。「人をシステムや制度の中にあてはめる」ことが、ケア・保育の危機としてお話の中にもあげられていたが、研究においては、「子どもを枠組みや理論にあてはめる」ことが、ある種の危機として認識されるべきではないだろうか。

以上、学会で考えたことを簡単にまとめてみたものの、私自身、未だに「ゆらいでばかり」である。未知の事柄に圧倒され、わずかに生えた「根っこ」が切り離されて飛んでいってしまわないように、研究生活を過ごしていきたいと思う。

(お茶の水女子大学)

# たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(8)

しょうごもり  
庄籠 道子

## セクハラ事件の巻

九月になった。朝晩は涼しくなつたので、お母さんが分厚い服を出してくれた。それを着て幼稚園に行くけど、昼間はまだまだ暑い。走り回るとますます暑い。

園庭を走り回ったみんなは、

「あついよー」

と部屋に入る。

「わー、汗びっしょり。きがえがある人はきがえなさい。ない人は、上の服を脱ぎましょう」

先生の言葉に、みんな服を脱ぐ。

「先生、脱いだら、下着のシャツや」

「ええがな。しばらくシャツで涼んどき」

「はーい」



しばらくした時だった。あいこがかずをドン！と押した。見ていた竹田園長先生が

「あいちゃん、ちょっと、おいで。今、かずくんを押しなね。どないしたん？」

あいこは黙ってうつむいている。顔がとても怒っている。

「どうしたん？ あいちゃんは、わけもなく、お友達を押ししたりする子やないわ。なにかあったん違う？ 言うてみ」

籠先生もやってきて言う。しかし、あいこは黙って口をへの字にしている。

「あかんやんか。お友達を押ししたりしたら。あぶないや



んね」

あいこは、黙ってうなづく。だけど、何か変だ。

ふたりの先生に見つめられて、あいこは、意を決したように言った。

「あのね、かずくんがね、ここに手を入れた」

あいこは自分の下着のシャツの胸を指した。

「ん、まあー！」

「かずくん、こっち、きなさい！！」

ふたりの先生が同時に叫んだ。ふたりとも顔が真っ赤になつてふるえている。

かずは、しょんぼりうなだれて、ふたりの前に立った。

いつしよに遊んでいた三人組は顔を見合わせた。ばかだな。かずのやつ。籠先生ひとり怒らせてもおそろしいのに、ふたりも怒らせちゃったぜ。おおこわー。

かずはふたりの先生から、こつてりしほられた。あいこに何度も何度もあやまらなければならなかった。

## 開会式の練習の巻

運動会の練習が始まった。たけのこ幼稚園は子どもが十八人しかない。十八人だけで運動会をしてもつまらないから、たけのこ小学校の運動会に参加させてもらう。今年、かけつこと、親子での演技と、「だんご三兄弟」に出ることになった。そうそう、入場行進にも出るんだ。開会式もラジオ体操もいっしょにさせてもらえるんだ。

きょうは、小学校で入場行進の練習がある。幼稚園もいっしょに練習だ。

たつやのおにいちゃんがいる。もみのおねえちゃんの手をふっている。二十分休みによく幼稚園に遊びに来てくれるゆかりねえちゃんもいる。うれしいな。幼稚園の子どもは大興奮。

六年生・五年生……と順番に入場門から入っていく。

幼稚園は一年生のあとだ。背の小さい順に並ぶ。きみなりとなみかが先頭だ。運動場を一周する。一番小さなきみなりの手をぐいぐい引つ張って先生が歩く。じゃないと、一年生との距離がどんどんあいてしまう。開会式の時、幼稚園は六年生の隣だ。六年生は大きいなあ。

正面には朝礼台。全校児童と幼稚園がずらつと並んでいる。朝礼台の横では、司会の森先生がマイクを持っている。校長先生をはじめ全部の先生方が、前に並んだり、児童の間を歩いて注意をしたりしている。

「優勝旗返還。……児童代表、さっと前に出なさい！きびきび走って！」

司会の森先生が六年生をしっかりとつかめる。しーんと緊張感がたがよう。

そんな時にも、ラジオのおっちゃんはやってくるのだ。ラジオ体操の音楽を響かせながら。

おっちゃんはラジオを左耳にあて、ラジオ体操の曲にあわせて右手をふったり、からだをキュッキュツと左右に向けたりしていた。みんな見てないふりをしながら、おっちゃんに目がくぎづけだ。おっちゃんは、ラジオ体操が終わるとラジオを消した。

「おはよう」

校長先生の前を通りかかったおっちゃんが校長先生にあいさつする。

「おはよう」

校長先生はまじめな顔で答える。おっちゃんは、朝礼台の前をとことこ歩いていき、司会の森先生にあいさつする。

「おはよう」

森先生はマイクを持ったまま

「おはよう」

と言う。

おっちゃんは、森先生をまじまじと見て

「なにしょん？」

と、聞いた。

「う……」

森先生が返答に困った。全校生徒が注目している。

「練習！」

森先生はあわてて一言手短に答え

「次、地区対抗リレーの優勝旗返還！」

と、開会式の練習を続けた。

しばらくしたら、隣の六年生がこっそり小声で隣の子に言っている。

「おい、みてみ。おっちゃんが走るで。走るで！」

おっちゃんがあか叫んでいる。

「加藤先生、そこ、どいて！」

保健室の先生が加藤先生に注意を送った。加藤先生はあわててどいた。

おっちゃんがむこうで よーいどん！ の構えをし

た。えっ？　今から走るん？　全校児童と朝礼台の間を？

あ、走った。全校児童がしーんと緊張して並んでいる前を。一直線に。全速力で。

右から左にかけぬけたおっちゃんは、疲れたらしくよろよろしながら、朝礼台に歩いていった。いつのまに置いたのか朝礼台のすみのラジオを取って、そのままよろ

## 「じゅんぐんです」の巻

いよいよ、運動会当日だ。校庭に万国旗がはためいている。入場門にも退場門にもちり紙の花がかざられている。各地区のテントが所せましと立てられている。青空の広がった絶好の運動会日よりだ。みんな緊張しながらはりきっている。

入場行進も開会式も無事にすんだ。ラジオのおっちゃん、客席や準備物の置いてあるテントをうろうろしている。誰かにもらうらしく、時々たばこをすっている。

よろしながらどこかへ去っていった。

三人組は誰か笑うかなと思った。でも、小学生も先生達も誰も笑わなかった。誰も何も言わなかった。あいかわらず、しーんとしていた。そして、何事もなかったかのように、開会式の練習は続けられた。

「おっちゃん、灰皿はここやで」

小学校の先生がおっちゃんの前に灰皿をさしだしている。

さあ、僕たち幼稚園のかけっこだ。

四人ずつ走る。マイクを持った籠先生がついている。今から走る四人の子どもの口元に順番にマイクをむける。ひとりひとり名前を言うのだ。

「やまぐちきみなりです」

拍手が起こった。もはやスターである。

「うめだなみかです」

またまた拍手。ひとり言うたびに拍手。次はじゅんの番だ。籠先生がマイクをむけた。

「おのだじゅんくんです」

どっと笑いがおこった。そういえば、じゅんの家に電話すると「はい、おのださんちです」つてじゅんが出る。

じゅんには負けるぜ。

かけっこも無事に終わった。「だんご三兄弟」もかわいかったよと評判だった。小学生も走ったり踊ったり好評だった。午前の部が終わった。幼稚園の子どもは、これで解散。帰ってもよし、おうちの人と応援してもよし。

さあ、みんなお昼ご飯だ。地区ごとのテントの下で。

みんなにぎやかにお弁当をひろげる。アイスクリーム屋さんも来ている。あ、じゅんのやつ、もうアイスクリーム買ってる。運動場のトラックには、もう誰もいない。む

こう側に用事があっても、目立つから誰もトラックは通らない。遠回りでもテントの外を回る。まわりはにぎやかだけど、トラックでは万国旗だけがはためいている。本部席から、静かなバックグラウンドミュージックが流れている。

その時だった。

ラジオのおっちゃんがトラックの中にひとりで登場した。スタートラインで、たったひとり走る構えをした。

おっちゃんはトラックをみすえた。

「やつ！」

おっちゃんはひとり、かけ声をかけて、気合を入れて走りだした。万国旗のはためく中を、何百人もの観客（たいていの人はお弁当を食べていて気がついてないけど）の中を全速力で走る。たったひとりで。じゃまするものはなにもない。おっちゃんの晴れ舞台だ。

たけのこ村の人たちはもちろん誰もおどろかない。毎年恒例のことだから。

（保育研究グループ はるにれ）

# 編集後記

佐藤茂樹先生の「十八世紀ドイツの子どもの本」の連載が今回で終わる。遠い時代の書物を読むにはその頃の社会的構造とのかかわりを読みこまなくてはならない、ということ、を、当時の教育書よろしく、会話形式で解説してくださっていて興味深い。先日大学院の学生さんと明治・大正年間の「幼児の教育」誌を読んでいたら、「なんだかおかしくて笑えてきてしまう」という感想が出た。現代と当時との家庭関係、社会構造の違いや、子ども観の違い、それが語られる言葉遣い、仮名遣いの違い、その上に現代とは一種異なった独特の文章のリズム……。いたっ

て大真面目な内容との奇妙なアンバランス感が「笑い」を誘うというところらしい。

子どもが新しい書物で、大人はその読者だとする。その表現が稚拙で未熟で「滑稽で笑える」というような保育者がいたら、それは嘲笑という笑いだ。一方、子どもの表現の中に、その子どものひたむきさや育つことへの希望をみいだして、思わず相好をくずすという笑いもある。大人の笑いの質の違いを、おそらく子どもは瞬時に読み取っている。大人がひと世代上の高みから見下ろした笑いに子どもは敏感であるし、こうした笑いに追従してどうにか生きていく子どもを「いい子」だといっているいいだろうか。

(浜口)

●本誌のご感想やご意見などは、  
youjinai@yahoo.co.jp へ。

## 幼児の教育

第二〇四巻 第十一号

(二〇〇五年十一月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十七年十一月二日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-21-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四-一

☎〇三-五三九五-六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇-1-196400

☆

本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

最

新

刊

# 「気になる」 から はじめる 臨床保育

保育学からの  
親子支援

土谷みち子 編著  
太田 光洋



「保育者を元気にする本」ができました。この本は、保育者が親子支援・子育て支援に、元気に楽しく取り組めることを願って書かれたものです。

「気になる」をキーワードに、親子支援・子育て支援の現場を第一線で支えている保育者の実践を多数紹介し、「気になる」ことについて保育者がどんな見立てを行い、どんな支援をしていたのかを詳しく述べています。子どもの命の輝きを引き出し、人生の土台を支えている保育者。そんな保育者に向けてエールを送るものです。

21×15cm/256頁  
定価1,785円(税込)

## 【目次から】

- 序 章 臨床保育とは
- 第1章 子どもが「気になる」
- 第2章 親が「気になる」
- 第3章 親子関係が「気になる」
- 第4章 保育者の環境が「気になる」
- 第5章 子育ての支援環境が「気になる」
- 第6章 「気になる」とはどのようなことか

キンダーブックの

## フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。



最

新

刊

# 子どもの心が かがやくとき

これからの幼児の育ちを考える

漆原智良 著

戦災孤児として戦後を迎えた著者が、自らの体験をもとに、「子への愛情とは何か」をわかりやすく説いています。子どもへの愛情の示し方から、悩む保育者への優しさあふれるアドバイス・絵本の読み聞かせまでを感動的に織りなし、保育・教育・育児にかかわるすべての方々へ贈ります。



## ●目次から

- 第1章 ハマユウの花のように  
—わが半生から学んだ幼児教育
- 第2章 幼児との温かい心のふれあい  
—保育者のひとことが子どもを伸ばす
- 第3章 『読み聞かせ』を楽しむために
- 第4章 保育の悩み相談 Q&A
- 第5章 スピーチの基本ABC
- 第6章 月別『書き出し』文例集

21×15cm/256頁  
定価1,365円(税込)

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。